

グリム・メルヒェン「踊って擦り切れた靴」と ハンガリーの民話「靴をはきつぶす王女たち」について — 舞踊とハンガリーの伝説を手がかりとして

鶴田涼子

要旨：『子どもと家庭のためのメルヒェン集』*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*の「踊って擦り切れた靴」*Die zertanzten Schuhe*は、『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』のATU 306番「踊って擦り切れた靴」(*The Danced-out Shoes*)に分類される。類話である『ハンガリー民話集』の「靴をはきつぶす王女たち」と『ハンガリーの伝説』の「12人の踊り姫」との比較を行うことで、グリム・メルヒェン「踊って擦り切れた靴」に描かれていない、もしくは伝承される間に変化した物語の背景を知ることができる。姫たちが結ばれることを願う王子たちの過去については、『ハンガリーの伝説』を参考にすることにより、伝承過程で失われたであろう物語の空隙を埋めることが可能となる。また、「踊って擦り切れた靴」においては、タイトルが変更されたことで民話の解釈に新たな可能性が付与されたと考えることができる。

0. はじめに

ハンガリーの民俗学者ジュラ・オルトゥタイは、デーグ・リンダ、コヴァーチ・アーグネシュとともに1960年にブタペストで412篇からなる『ハンガリーの民話』全3巻を出版した。そのなかに収められた話のひとつが「靴をはきつぶす王女たち」である。この話はドイツのグリム兄弟が出版した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*（初版第1巻1812、第2巻1815、これ以降グリム・メルヒェンまたはKHMと略記する¹⁾）のKHM 133「踊って擦り切れた靴」*Die zertanzten Schuhe*と酷似している。両者には、明らかに共通する部分がある一方で完全には一致せず、それぞれに独自の面白さをもつ。本論は両者の類似性を認めたくえて、両者を相互補完的に読むことにより、これらの話の固有性を引き立たせることを目指す。その際、ハンガリーの伝説および舞踊に関する記述を参照する。本論の目的は、第一にハンガリーの民話を紹介すること、ハンガリーの民話があり世に知られていないことに着目し、その背景を考察すること、第二に上記の民話の共通項を明示し、ハンガリーの伝説を比較対象に加えることによりグリム・メルヒェン「踊って擦り切れた靴」の解釈にひとつの案を示すことにある。

1. 『子どもと家庭のためのメルヒェン集』「踊って擦り切れた靴」*Die zertanzten Schuhe*

KHM 第7版「踊って擦り切れた靴」の登場人物とあらすじは次の通りである。

登場人物：王 ein König / 12人の姫 zwölf Töchter / 王子 ein Königsson / 貧しい兵隊 ein

armer Soldat／老婆 eine alte Frau

昔、12人の美しい姫をもつ王がいた。姫たちは大広間で一緒に寝ていたが、王が翌朝、ドアを開けて見ると、みんなの靴が踊り抜かれてすり切れていた。王は姫がダンスをする現場を押さえた者は姫を嫁にして王位を継がせるが、三日三晩で現場を押さえられなかった者は命はない、と布告を出す。ある王子がそれに挑戦する。しかし、王子は三晩とも眠くなって失敗し、首をはねられる。多くの挑戦者がその後失敗した。あるとき、退役した兵隊が一人、老婆と出会い、それを試みることになる。老婆は夜に葡萄酒を飲んではいけないこと、飲まずに寝た振りをすることを忠告し、姿が見えなくなるマントを兵隊に渡す。

兵隊はそのとおりに実行する。姫たちは兵隊が寝た振りをしたことに気づかずに、きらびやかに飾り立ててダンスに出かける。長女の姫がベッドをコツコツ叩くと、ベッドは地に沈み、そこから姫たちは下へ降りてゆく。これを見て、兵隊はマントを羽織って下へついて行く。地下は銀と金とダイヤモンドの並木道になっている。兵隊はその木の枝を証拠に折り取る。兵隊が枝を折る音は末の姫には不気味に聞こえたため心配するが、一番上の姉は、その音は、もうすぐ王子たちが救われることになるので、そのための祝砲だという。その先には川があり、小舟に王子が一人ずつ乗り、姫をそれぞれ待っている。兵隊と一緒に乗り込んだ小舟の王子はいつもより重いという。川の向こう岸には明かりのついた宮殿があり、音楽が鳴り響いている。そこで皆はダンスをする。末の姫は最初から何か変だと気づいているが、長女の姫は気にしない。翌朝三時までダンスをして、靴が駄目になったので、姫たちは王子たちに別れを告げ、帰路につく。兵隊は先回りをして寝た振りをする。

兵隊は三晩、姫のダンスに隠れて同行する。三度目には杯を証拠品として持ち帰る。彼は王に三本の枝と杯を証拠として見せる。兵隊は長女の姫と婚礼の式を挙げ、王の亡き後、国王が兵隊のものになることが約束される。王子たちは、姫たちと踊った夜の分だけまた呪いをかけられることになる。²⁾【類話との異同を分かりやすく示すため下線を付す。】

「踊って擦り切れた靴」は、イエニー・フォン・ドロステーヒュルスホフ Jenny von Droste-Hülshoff³⁾より提供された話で、初版（1815年、第2巻）では47番、第2版以降は133番に収められている。⁴⁾上記の話の他にはパーダーボルンおよびヘッセンの話が伝わっている。さらにこの民話はヨーロッパに広く伝播しており、デンマーク、アイスランド、ノルウェー等の北欧以外にも、ポルトガル、ギリシア、またスロヴェニア、ブルガリア、チェコ等、東欧に分布する。⁵⁾

『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』*The Types of International Folktales -A Classification and Bibliography*⁶⁾によると、この話はATU 306番「踊って擦り切れた靴」(The Danced-out Shoes)に分類される。ATUによるとこの話の筋は、姫が毎日靴を駄目にしてしまうので、王がその秘密を知りたいと願うものである。この難題に挑み、失敗した者は命を落とさねばならない。主人公は何者かより呪具を与えられ、姫たちの秘密を暴くことに成功する。

Walter Scherfはこの話を魔法メルヒェンと捉えているが、グリム・メルヒェンの基本形式の分析を試みたWalter A. Berendsohnは、結末の結婚が意に反すると受け取り、この話を笑い話(Schwank Märchen)に分類している。⁷⁾KHMの版の変更点としては、眠り薬の入った葡萄酒を飲んだように見せかけるために、兵隊が自らの顎にスポンジを結びつけた様子が第2版から加筆される。⁸⁾また第4版からは兵隊のことを“der Lümmel”粗野な男、無作法な男と呼ぶ台詞が加わる。⁹⁾

2. 『ハンガリー民話集』「靴をはきつぶす王女たち」

「靴をはきつぶす王女たち」の登場人物とあらすじは次の通りである。

登場人物：王／3人の王女／若者／貧しい召使の若者

昔、3人の美しい姫をもつ王がいた。王の悩みは、毎晩真夜中に姫たちが王宮からいなくなり、翌朝には姫たちの靴がびりびりに裂けていることだった。王は姫たちが夜中にどこへ逃亡するかを報告できた者に、娘を嫁にして王権の半分を与え、王位を継がせるが、真実を明らかにできぬ者は首を斬ると布告を出す。若者がそれに挑戦するも、12時の鐘が打つと強風が吹き、若者は倒れてしまう。そこで性悪な王女たちは若者を足蹴りし、蒸発する。その後、99人の若者が挑戦するが、首をはねられる。明日は100人目という夕方、貧しい召使の若者が王のもとを訪ねる。一番下の王女は、若者の明日を思い、涙をこぼす。

若者は運試しをしたいと王に願ひ出て、王女たちの部屋の前で寝ずの番を試みた。真夜中には彼もまた眠気に襲われ、横になってしまった。その時、王女たちが部屋の外へ出ると、一番上の王女は若者をひどく足蹴りし、真ん中の王女は若者のわき腹を足蹴りした。一番下の王女は、やさしく身をかがめ、若者に口づけした。すると若者の眠気がさめ、王女たちの後に従うことができた。

王女たちは大地を開き、地中へ降りていった。するともう一度地上に出た。そこは銅の森で、銅のりんごが実っていた。若者がりんごを一つ取ると森がかすかに鳴ったので、末の王女は何か聞こえると言うが、姉たちは前へ進んでいった。次に銀の森へくると、そこには銀の梨が実っていた。若者が梨を一つもぐと森がかすかに鳴ったので、末の王女は何か聞こえると言うが、姉たちは前へ進んでいった。次に金の森へさしかかり、そこには金のプラムが実っていた。若者がプラムを一つもぐと森は鳴り響き、地も揺れた。末の王女は何か聞こえると言うが、姉たちは前へ進んでいった。金の森を出ると、黒い城があり、そこには黒王が住んでいた。黒王には3人の息子がおり、王女たちは夜毎、彼らのもとへ通い、ダンスを楽しんでいたのであった。若者は黒王一家の食卓から銀のスプーンと、ナイフとフォークを持ち出した。その後は王女たちに見つからないよう、急いで戸口の前へ戻り、寝た振りをした。年上の王女2人は、若者を散々蹴とばし、首を斬られるがいい、と言った。若者は王に見たもの全てを話し、銅のりんごと銀の梨と金のプラム、スプーンとナイフとフォークを提示し、姫たちの秘密が明らかとなった。若者は末の王女を結婚相手を選んだ。¹⁰⁾【類話との異同を分かりやすく示すため下線を付す。】

このように「靴をはきつぶす王女たち」とKHM 133は共通の筋をもつ。ボルテ・ポリフカの解説には、KHM 133の類話のある国、地域が載せられているが、そこにハンガリーとは記されておらず、Magyarischと記されている。¹¹⁾『ハンガリー民話集』の解説によると、ベネデク・エレク（1859-1929）の若い時代の民話集『セーケイ民話の語り手』が『ハンガリー民話集』の出典であり、それらは前世紀の民話素材と同程度に信憑性のあるセーケイ地方の民話と見られる。ベネデク・エレクの父は村で有名な優れた民話の語り手であったようで、彼は大部分を父親から聞き伝え、その記憶を元に書き記したとされる。¹²⁾セーケイ地方とは、ハンガリー（マジャール）民族の中でもっとも古く、有力な部族の一つで、その起源については諸説あり、いまだに明らかではない。建国期のマジャール民族と早くから行動を共にし、言語・文化を共有してきたとされ、現在はエルデーイ東部のカルパチア山脈西麓一帯（セーケイ地方）に居住して、セーケイ社会を形成し、最も古いマジャールの特質を伝承した文化の継承者としての誇

りが高いようである。¹³⁾

ハンガリーの民話が初めて刊行されたのは1822年のこと、ハンガリー語ではなくドイツ語によるもので、図書館司書を務めていたガールによる成果であったといわれる。ハンガリーの歴史に鑑みると、「1820年から1830年代には、自由主義的な貴族を中心としてハンガリー人の民族的自覚が高まり、開明の大貴族のサーチェニ・イシュトバーン（1791-1860年）らの努力によって、ハンガリー民族博物館やハンガリー民族劇場やハンガリー科学アカデミーがつくられた」¹⁴⁾ ため、ハンガリー民話の出版もこうした流れの中に位置づけることができるだろう。また、1820年から1848年の改革期においてハンガリー語が整備され、ハンガリー民族という意識も生まれてきていたために、民俗文学という形でハンガリーの文学が開花したとされる。¹⁵⁾ 逆にいえばこれ以前は、文字でまとめられた民話、物語などの文芸は発展の途上にあった。「ハンガリー人は、侵入民族との長い争闘において、荒々しい東方人をくいとめる強大な砦の役をつとめた。彼らは三世紀に亘るトルコ人の羈絆を不拔の堅忍で堪えしのぐことによって、恐ろしい大敵から西方の世界を掩護し」¹⁶⁾ たという歴史がある。彼らの物語は概ね叙事詩的であり、史的事実に基づいているものが多く、ハンガリー語による文学的産物が世に出る前から詩や歌が歌われていた。レオ・サルカディによると、ハンガリー人は一大叙事詩をもっていたが、キリスト教の興隆が原因で後世は僅かな断片を残すのみとなったという。11、12世紀に遍歴僧たちがハンガリーの地に入り、国民を改宗させる便宜的な手段として古来の伝説や詩を沈淪させたものと見られる。¹⁷⁾ このような背景からハンガリーの民話や伝説は、多くは残されていない。

3. 伝説との比較

11、12世紀の記録をもとに伝説をまとめた『ハンガリーの伝説』に「12人の踊り姫」という話がある。題名の示すとおり、12人の姫たちが登場し、夜を踊り明かすストーリーである。「12人の踊り姫」は、これまでに紹介した2つの民話と共通する筋であるが、先の2話よりも長く、少々複雑である。この話には蟋蟀の姿に変えられた妖精国の王子たちが登場し、黄洞窟に棲む魔法婆の娘との結婚を拒否したという理由で呪いをかけられていることになっている。グリム兄弟は、『ドイツ伝説集』 *Deutsche Sagen* (1816) の序文で、童話、伝説および歴史の親縁性について触れたのちに、「童話は詩的要素が勝り、伝説は歴史的要素が勝る」¹⁸⁾ とし、領域の異なりを示したが、『ハンガリーの伝説』の「12人の踊り姫」は、グリム兄弟が想定する伝説 Sage と比較すると、内容や語り、構成の面で大きく乖離すると思われる。『ハンガリーの伝説』の「12人の踊り姫」は、Nándor Pogany により再構成されたものであろう。以下にあらすじを簡潔に載せる。

登場人物：農夫／王／12人の姫／老乞食／蟋蟀（妖精国の王子たち）／魔法使いの老婆

あるとき一人の農夫が田舎を飛び出して、幸運を探してみようと都を目指す。その道中、老乞食と出会い、彼の望み通りパンや水を与え、町まで背負って運んでやる。老人は農夫の親切心に感服し、身を隠すことのできる魔法の帽子を彼に授ける。町へ到着した農夫は王に12人の娘がいること、末娘との結婚を望むならば、11人の娘が6足のスリッパと6着の踊服とともに夜毎どこへ姿を消すのか、その全てを監視する必要があることを知る。これまでの挑戦者は大勢いたが、皆夜になると姫の寝室の前で眠ってしまっていた。農夫は意を決し、名乗りでるが、失敗した場合は城門の前に曝首にしてもよいと言う。農夫は帽子を使い、早々と姫の寝

室で姫たちを待ち構えた。11人の姫たちは、黄洞窟に棲む魔法使いの老婆により蟋蟀に変身させられた11人の王子たちと毎晩、踊っていることが判明する。農夫が姫たちの秘密を明かし、晴れて問題が解決したという時、王子たちの父である蟋蟀の王が現れ、末の姫をさらう。農夫は姫を助け、11人の王子たちを救うために難題に挑む。(中略)

農夫の活躍により王子たちの魔法が解かれる。11組の新夫婦たちは妖精国へ帰り、農夫と末娘は結婚し、農夫は王の後継ぎとなる。¹⁹⁾【類話との異同を分かりやすく示すため下線を付す。】

4. 比較検討

KHM「踊って擦り切れた靴」、『ハンガリー民話』および『ハンガリーの伝説』を比較すると次のような違いが分かる。

	グリム・メルヒェン	『ハンガリーの民話』	『ハンガリーの伝説』
主人公	貧しい兵隊	貧しい召使の若者	農夫
援助者	老婆(姿を隠すマント、助言)	(末の姫)	老乞食(姿を隠す帽子、助言)
姫たちの踊り	12人の姫と王子	3人の姫と王子	12人の姫と11人の王子と農夫
結末	兵隊と年長の姫の結婚	若者と末の姫の結婚	末の姫と農夫、11人の姫と王子の結婚

KHM「踊って擦り切れた靴」では老婆が登場し、兵隊に贈り物や助言を与えるが、『ハンガリーの民話』では老婆と同等の援助者は登場しない。『ハンガリーの民話』において年長の2人の姫は性悪であるため、末の姫が援助者のような役割を果たしているように思われる。

KHM「踊って擦り切れた靴」では、王子たちの呪いは解けず、踊った夜の分だけさらに呪いが延びる、という結末である。しかし、王子たちの過去については特に明らかにされず、本当はもうすぐ呪いが解けるはずであったこと、ところが結局はそれが実現されなかったという事実のみが言及される。そのためこの話は王子の身に起こった出来事は粹物語のような形で跡を残している。『ハンガリーの伝説』を参照すると、王子たちの側にも何らかの事情があるという、入り組んだ話の筋がKHMなどの類話にも元来はあったのではないかと推測することができる。

KHM「踊って擦り切れた靴」では、12人の王子たちは再び呪いをかけられることになり、ハンガリーの民話では若者と末の娘が結婚をするという結末が述べられるが、姫たちが踊った相手である3人の王子については言及がない。KHMの場合、王子たちは呪いという罰を受けることになるため、魔法メルヒェンとしては異例のメルヒェン、もしくはアンチ・メルヒェンの要素を含むと考えることができよう。

結末については、『ハンガリーの伝説』のみ登場人物全員が結婚する。KHM「踊って擦り切れた靴」においても『ハンガリーの民話』においても、主人公と結ばれる姫以外の姫たちと、姫たちのダンスの相手であった王子たちの行く末については全く触れられていない。

5. 踊り

ここに紹介した3話において共通する部分は、姫たちが踊る場面である。KHM「踊って擦り切れた靴」の提供者は19世紀を代表するドイツの女流詩人アネット・フォン・ドロステーヒュルスホフ Annette von Droste-Hülshoff を妹にもつ、イエニー・フォン・ドロステーヒュルスホフ とされており、ドロステ姉妹はミュンスターのカトリック系貴族の出身である。²⁰⁾

1814年9月12日にヴィルヘルムへ宛てた手紙において、彼女は「12人の姫たち」*Die zwölf Prinzessinnen* というタイトルでこの話を提供している。初版第2巻でのタイトルが示すとおり、登場人物はプリンセスたち *Prinzessin* であり、*Königstochter* ではない。ドロステ家の娘たちはフランスを経由してこの話を聞いたのであろうことが推測できる。

KHM「踊って擦り切れた靴」において、王子と姫たちが踊る場面は「どの王子も自分の姫と踊りました（初版）」とある。この踊りは広く組舞踊ということになるだろうか。姫たちが踊り明かした証拠として、「なぜなら、姫たちの靴はそこにはありましたが、底に穴が開けていたのです。」と記されている。このように靴の底に穴が開く程の激しい踊りとはどのようなものだろうか。クルト・ザックスは世界の舞踏を特徴と時代ごとに分析した著書『世界舞踊史』*Eine Weltgeschichte des Tanzes* (1932) において16世紀のドイツで行われた回転舞踊（ドレータンツ）をレントラーという中庸なテンポの滑走回転舞踊との関連から再構成することを試みている。²¹⁾ 民話における「踊り」は、『イメージ・シンボル辞典』に拠ると実りを象徴する。²²⁾ 「ダンスは元来農民が豊穡を祈願して神々に捧げた儀式」であった。²³⁾ また王家の宴ではしばしばダンスが行われたが、「集団で踊る農民に対して、貴族は男女が対になったカップルダンスを踊るので、ダンスに名を借りて、性的相性を試す行為が行われたとしても不思議ではない」。²⁴⁾ このような説が示すように、靴と並んで踊りには性的な意味合いがある。

ドイツの古い慣習によると「靴 *Schuh*」のモチーフは、描かれ方によって、他人との個人的な関係、婚約、所有権等を表すとする見解がある。²⁵⁾ シンデレラ物語に代表される靴の扱われ方はこれまでに多くの解釈が生まれている。*Die zertanzten Schuhe* は、靴の総称である *Schuhe* という語が使用されているが、この靴は踊りに使われた靴と考えてよいであろう。ボルテ・ポリフカは、ATU 306 型のこの民話と、夜に踊り戯れる魔女の関連を指摘している。²⁶⁾ 『ハンガリー民話集』の「靴をはきつぶす王女たち」では、王子と王女がダンスを楽しむ場面において、「輪になって踊り続けた」と記されている。いわゆる輪舞が毎夜行われていたと考えられる。

『ハンガリーの伝説』「12人の踊り姫」における踊りの場面は次のようである。

突然、身も心も踊るような音楽が起り始めた。すると、人間ほどある11匹の大蟋蟀が、部屋の中へ現れた。一礼が済むと、愉快なダンス曲が鳴り出す。ダンスは静かに始まった。曲は、人の足を誘うように、だんだんと早くなる。ダンスもまた、ますます激しくなってきた。遂には、嵐のように踊り狂い始めた。見る見る床の上は、靴の断片、服の破れ片で、いっぱいになった。ダンスは、いよいよ猛烈になるばかり。用意の靴と服とが納められてあった。袋もいまは空となった。²⁷⁾ (強調筆者)

予備の靴と服までもが使い物にならなくなるほどに激しく踊っていることが分かる。このような、踊り続けるという表象からは、11、12世紀以降のヨーロッパで流行したとされる「舞踏病」²⁸⁾ や、ペストの猛威を前に死の勝利がうたわれた「死の舞踏 *Totentanz*」が想起される。²⁹⁾

KHM「踊って擦り切れた靴」において夜毎に踊りに出かけるという行為もしくは踊るという行為が、姫たちの抑圧された日々の環境からの解放であるとするならば、ここでの踊りは死の不安や恐怖、ヒステリー症といった心的要因から来るものではなく、その場の楽しみを追求し、享楽にふける行為、もしくは未来にあるべき自分たちの生への展望を意味しているように

思われる。KHM「踊って擦り切れた靴」には、兵隊が木の枝を証拠として折り取る場面がある。兵隊が枝を折る音を末の姫は不気味に感じるが、その一方で一番上の姉は、その音は祝砲で、もうすぐ姫たちが王子たちを救うことができるため、その祝いだと理解している。KHM「踊って擦り切れた靴」で行われる夜毎の踊りは、一時的で単純な快楽的行為というよりも、むしろ現状を打開する術であり、姫と王子たちの明るい未来に彼らの気持ちが向けられているものと考えられる。この点で先の「舞踏病」や「死の舞踏」とは意識の矛先が大きく異なる。

夜毎、身を隠して踊りに出かけるという行為が、彼女たちを見守る役目を担うはずの、父の抑圧からの解放であるとするならば、この話はシンデレラ物語の系譜に位置づけられる可能性が生じる。ジェーン・ヨーレンによれば、シンデレラ物語に認められる共通項は、「富も身分もありながら灰まみれの様で不当な扱いを受けている主人公の存在：動物あるいは鳥、母親代わりのものから魔法の力や助言³⁰⁾を得ること：女主人公が美しくきらびやかな装いで舞踏会や祭り、教会のような場で人の目に触れる：そして証拠の品によって認知されるに至る——という諸要素である」³¹⁾と述べている。こうした基準から見れば、「踊って擦り切れた靴」はシンデレラ型の民話には合致しないことになる。ATU 番号も、例えば KHM 21「灰かぶり」Aschenputtel は ATU 510 a「シンデレラ」Cinderella に分類され、KHM 133「踊って擦り切れた靴」は前述の通り ATU 306 であるので、分類上、異種のものである。しかしながら、話の筋を追っていくと、「父性的な力」や「父と娘の葛藤」が「踊って擦り切れた靴」内の諸問題として描かれており、こうしたテーマはシンデレラ型に属する「千匹皮」KHM 65 Allerleirauh の主題と一致する。「踊って擦り切れた靴」には、明確な形での「いじめ」が描かれているわけではない。しかし姫たちが夜毎に寝室を抜け出すという行為から、王である父という存在の抑圧によって昼間の自由を奪われているという背景を読み取るならば、「踊って擦り切れた靴」もまたシンデレラ型の民話の異種のバリエーションとして捉えることができるのではないだろうか。先述のように、ヴァルター・シェルフはこの話を魔法メルヘンと捉え、父と娘の葛藤を描いているとし、娘を自由することを望まない父が娘を幽閉する「マレーン姫」KHM 198 Jungfrau Maleen や、父が娘を自分の妻にしようと試みる「千匹皮」KHM 65 Allerleirauh との共通点を指摘する。³²⁾ 例えば KHM 第 7 版の「千匹皮」では、父王から父ではない男性との結婚を経て父と娘の葛藤が解消する図式へと書き換えられている。³³⁾ KHM「踊って擦り切れた靴」における夜毎の踊りは、父の影響下から逃れ、異界へと自ら足を踏み込むことで新しい環境を得ようとする積極的なイニシエーションの行為であるものと考えられよう。

6. Die zwölf Prinzessinnen から Die zertanzten Schuhe へ

先述の通り、初版においてこの話のタイトルは Die zwölf Prinzessinnen であったが、第 2 版以降 Die zertanzten Schuhe へ変更されている。この際、タイトルを見る限り、話の焦点が姫たちという登場人物から姫たちによって使われた靴へと移り変わっていることに気付く。このタイトルが示すのは、靴が踊りに使用され、ぼろぼろになっているということである。使用された、使い古された、擦り切れたという意味を表す言葉は、benutzt, verbraucht, vertanzt などいくつもあるが、なぜ zertanzt という語が選択されたのだろうか。

KHM「踊って擦り切れた靴」は、姫が王子と結びつくという、一般的な、ありがちなメルヘンの幸せな結末ではなく、兵隊が長女の姫と婚礼の式を挙げ、王様の亡き後、国王が兵隊

のものになることが約束される一方で、王子たちは姫たちと踊った夜の分だけまた呪いをかけられる、という結末となっている。この話において主人公はあくまでも役目を終えた兵隊であり、12人の姫たちではない。そのため、兵隊にとってはハッピーエンドと言ってもよいだろうか。そして、王子にかけられている呪いの延長はどのように理解することができるだろう。梅内は、この話に姫の精神の分裂を見だし、王子のダンスにミンネ・ディーンストの要素を読み取ることで、呪いが延長される背景を説明付けようとしている。³⁴⁾

非分離前綴りであり、接頭辞の *zer* と競合することもある *ver-*は、代理、消滅、浪費、閉鎖、結果等を意味する。これに対して *zer* は、破壊、崩壊、分裂、散乱等を意味する。他の言葉ではなく *zertanz* がタイトルに使用された理由として、この言葉によって遊び尽くせぬうちに姫たちの精神の崩壊（夜毎に異界へ遊びに行く行為）と物的な崩壊（毎晩靴が擦り切れるまで踊り、消費すること）が同時に起こっていることを描こうとしているのではないか、という推測もできなくはない。しかしながら、姫たちの精神が破壊や崩壊をしているということがこの話の核となる部分とは言いがたい。むしろ、父の抑圧下にある自分たちを解放すべく、姫たちは前向きに行動をしているのではないだろうか。つまり、*Die zertanzten Schuhe* には、「靴」に象徴されるように、父に所有された環境を姫たち自身で打開するという意味合いが込められているのではないだろうか。このように理解することで、縛られていた環境に、結ばれた一組の夫婦に象徴される一筋の光が見えてくるように思われる。靴によって表されている父の呪縛を破壊することに主人公の兵隊は荷担したということができるだろう。このように理解すると、第2版以降「12人の姫たち」から変更された「踊って擦り切れた靴」というタイトルには、次の三つの意味があるものと推測できる。一つに、この民話において姫たちが履いていた靴が物理的に擦り切れ、ぼろぼろになっているということ、二つ目として、そのように擦り切れた靴は姫たちの精神的な消耗を意味しているということ、三つ目には、これまで姫たちは父王に監視され、保護され、所有されている状況にあったが、所有を表すとされる靴が擦り切れることにより、そうした管理下にある状況の打開を象徴しているとする見方である。そして、この話が描いているものとは、姫の夜毎の秘密を突き止める兵隊の行為であり、それを手助けする老婆の行為であり、王子ではなく兵隊と年長の姫が結婚することによってもたらされる次世代への希望である。したがって、これまでの閉鎖的で先の見えない、縛られた環境にあった姫たちの生活にピリオドが打たれ、これまでとは別の次元における新しい世界が彼女たちに開かれるその始まりをこの民話は描いているのではないだろうか。兵隊という新たな血統の登場は、夜な夜な秘密をもたなければならなかった姫たちの現状を文字通り打ち壊す (*zerbrechen*) ための突破口となったのである。

註

- 1) KHM 各版の出版年は以下のとおりである。初版第1巻1812年、第2巻1815年、第2版1819年、第3版1837年、第4版1840年、第5版1843年、第6版1850年、第7版（決定版と呼ばれる）1857年。なお手稿は1810年である。
- 2) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen mit 184 illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke*. 19. Auflage, Vollständigs Ausgabe. Düsseldorf 2002, S.621-625. KHM 第7版からの引用は括弧内にページ数のみ記す。
- 3) ドロステ・ヒュルスホフ家からの採話は、他に KHM 68, 82, 112, 137 がある。

- 4) Hans-Jörg Uther: *Handbuch zu den "Kinder- und Hausmärchen" der Brüder Grimm: Entstehung-Wirkung-Interpretation*, Berlin 2008. S.284.
- 5) Johannes Bolte, Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 3*, Hildesheim 1992. S.78-84.
- 6) Vgl. Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales -A Classification and Bibliography, Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson, Part 1, ANIMAL TALES, TALES OF MAGIC, RELIGIOUS TALES, and REALISTIC TALES, with an INTRODUCTION*, Helsinki 2011, 188-189. 従来、民話の型を示すものとしてアンティ・アールネとスティス・トンプソンにより作成された話型分類番号が用いられていた (Vgl. Antti Aarne/Stith Thompson: *The Types of the Folktale*. Helsinki 1964)。通常この番号は、両者の名前の頭文字をとって AT 番号と呼ばれている。本稿ではハンス＝イェルク・ウータにより改訂補強された版を使用したため、改訂版の略称である ATU 番号を挙げた。例えば、「灰かぶり」は ATU 510 a、「千匹皮」は ATU 510 b に分類される。
- 7) Walter A. Berendsohn, *Grundformen volkstümlicher Erzählerkunst in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm: ein stilkritischer Versuch*. Hamburg 1921. S. 96.
- 8) 該当する場面を挙げる。([...] aber er hatte sich einen Schwamm unter das Kinn gebunden, ließ den Wein da hineinlaufen, und trank keinen Tropfen.)(S. 622)
- 9) KHM の手稿、初版、第 2 版のテキストは主に以下を参照した。
Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Die handschriftliche Urfassung von 1810*. Heinz Rölleke (Hrsg.), Stuttgart 2007.
Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Heinz Rölleke (Hrsg.), Cologny-Genève 1975.
Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm 1819/1822*. Uther, Hans-Jörg (Hrsg.), Hildesheim 2004.
- 10) オルトゥタイ・ジュラ編 (徳永康元他編訳) 『ハンガリー民話集』、岩波書店、1996 年参照。
- 11) *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 3*, S. 82.
- 12) 『ハンガリー民話集』、330 頁。
- 13) 『ハンガリー民話集』、261 頁。
- 14) 南塚信吾、『図説ハンガリーの歴史』、河出書房新社、2012 年、53 頁。
- 15) 『図説ハンガリーの歴史』、129 頁参照。また『世界の民話』によると、「ハンガリーには 9 世紀末にマジャール族が定住し、13 世紀には蒙古が侵入して来、16 世紀からはオーストリアのハプスブルク家が世襲で統治し、16～17 世紀には一時的に国土の大半をオスマン・トルコに支配された。19 世紀にはオーストリアのゲルマン化政策に抵抗したという歴史をもち、今は人民共和国を形成している。」とある。さらに「この国では 18 世紀にはすでに民衆が語り伝えている物語の聞き書きがあり、1825 年にアカデミーが創立されると、民話の蒐集がその主要な任務のひとつとされました。第一次大戦後には特に民俗音楽の面でベラ・バルトークやゾルタン・コダーイなどが出て伝承文化の再認識を促進したことは有名です。農民の多いこの国では冬の夜長の単調な作業のときに、眠気をさますために、お話や歌がもてはやされ、よい語り手や歌い手にはお礼の品や礼金が与えられたそうです。語り手には聞き手全体を見渡せる一番よい席が定められ、語り手は身振り、手振りに顔の表情も交じえて語ったものだそうです。」と記されている。(小沢 俊夫編、飯豊 道男訳、『世界の民話 新装 4 東欧』、ぎょうせい、1999 年、395-396 参照。
- 16) 山崎光子編、『世界神話伝説体系 33 ハンガリーの伝説 改訂版』、名著普及会、1980 年、4 頁。
- 17) 『世界神話伝説体系 33 ハンガリーの伝説 改訂版』、5 頁参照。
- 18) Die Brüder Grimm: *Vorrede*. In: *Deutsche Sagen*, Frankfurt am Main 1994, S. 11. 関連箇所は次の通りである。(Diese wohlthätige Begleitung ist das unerschöpfliche Gut der Märchen, Sagen und Geschichte, welche nebeneinander stehen und uns nacheinander die Vorzeit als einen frischen un belebenden Geist nahe zu bringen streben. Jedes hat seinen eigenen Kreis. Das Märchen ist poetischer, die Sage historischer; [...]) 引用箇所に下線を付す。

- 19) 『世界神話伝説体系 33 ハンガリーの伝説 改訂版』、241-262 頁参照。
20) ガブリエーレ・ザイツ（高木昌史、高木万里子訳）、『グリム兄弟：生涯・作品・時代』、青土社、1999 年、第 3 章参照。
21) 「踊って擦り切れた靴」における姫たちの様子を思わせる詩を紹介したい。クルト・ザックス『世界舞踊史』において、詩人ニコラウス・レーナウ（Nikolaus Lenau、1802 年-1850 年）の「シュティレンタンツ」が引用されているので紹介しておく。

それから彼は娘の頭上高く

手をあげる

彼の指は軸のようだ

娘はくるくる回る

美しさに力強さが加わったように。

なんと真直ぐに彼は踊っていくことか

気品に溢れた姿で、

だから娘は

右の方から軽やかに回って

左の方へとさっていく

彼の身軽なパートナーは、いま

その背後で踊らねばならぬ

踊りつつ彼の周りを回る

まるで彼は恋人に

閉じこめられたがっているようだ

まるで彼はこういっているようだ

“私のすべての望みと歓びの円を

私のために描いておくれ”と。

そしていま祝福された 2 人は

互いに手を取り合って

しなやかな動きで

互いの腕をすり抜ける

彼は娘をじっとみつめ

娘も彼をみつめるばかり

2 人は、たぶんいいたいのだ

なぜ私たち 2 人は結ばれて

互いのうでのなかで

私たちの生命のすべてを

共に果たせないのか

この踊りのように、なぜ？

クルト・ザックス（小倉重夫訳）、『世界舞踏史』、音楽之友社、昭和 47 年、1972 年、433 頁。第 9 章第 4 節内閉的組舞踊より。

- 22) アト・ド・フリース（山下圭一郎他訳）、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店 1984 年、164 頁。
23) 野口芳子、『グリム童話のメタファー 固定観念を覆す解釈』、勁草書房、2016 年、72 頁。
24) 『グリム童話のメタファー 固定観念を覆す解釈』、72 頁。
25) Vgl. Jacob Grimm: *Deutsche Rechtsaltertümer, Band 1*, Darmstadt 1974, S.214.
26) *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 3*, S.78-84.
27) 山崎光子編、『世界神話伝説体系 33 ハンガリーの伝説』、名著普及会、1980 年、248 頁。
28) 森義信、『メルヘンの深層』、講談社、1995 年、161-164 頁参照。
29) 浜本隆志、『魔女とカルトのドイツ史』、講談社、2004 年、24-44 頁参照。

鶴田涼子 グリム・メルヒェン「踊って擦り切れた靴」とハンガリーの民話「靴をはきつぶす王女たち」について—舞踊とハンガリーの伝説を手がかりとして

- 30) ウラジーミル・プロップは、これらの役割を担う者を、魔法メルヒェンにおける援助者とし、魔法メルヒェンに欠くことのできない一要素と述べる。ウラジーミル・プロップ（北岡誠司、福田美智代訳）、『昔話の形態学』、白馬書房、1987年参照。
- 31) ジェーン・ヨーレン（三宮郁子訳）「アメリカのシンデレラ」、アラン・ダンダス編、（池上嘉彦、山崎和怨、三宮郁子訳）、『シンデレラ：9世紀の中国から現代のディズニーまで』、紀伊国屋書店、1991年、350頁。
- 32) Walter Scherf: *Das Märchen Lexikon, Band 2*, München 1995. S.1441-1444.
- 33) 拙論、鶴田涼子、「グリム・メルヒェン「千匹皮」における父の求婚—不自由さと障壁をもたらす要因—」、『ドイツ文学研究』、第45号、（日本独文学会東海支部）、2013年、1-15頁。
- 34) 梅内幸信、「秘められた良心—『踊りでボロボロになった靴』(KHM 133)の深層心理学的解釈』、『人文学科論集』、第57号、（鹿児島大学法文学部）、2003年、1-31頁参照。